

以森伝心

No.

36

理事長 柏原康夫 筆

京都の森を守り育てる運動に参加しませんか

巻頭特集

茶道と森

茶の文化を支えてきた自然と森の恵み

特集2

森林の現状を考える

架線集材の現場から

インタビュー

柿迫 正紀氏

■ 京都の森の仲間たち
宇治炭山里山の会

■ 豊かな森を次世代へ
第40回全国育樹祭開催に向けて
第40回全国育樹祭の日程が決まりました
京都の森を守り育てる体験講座「大学の森で学ぶー森林環境教育と間伐体験」ほか

茶道と森

茶の文化を支えてきた自然と森の恵み

日本の風土が育んできた文化・茶道。茶道の中には日本人が自然から得てきた恵みとの関わりの深さが随所に見られます。裏千家の正教授を務める西方尼寺の藤原住職にお話を伺いました。

🍵 茶道と水とのかかわり

私が第五十世として住職を務める西方尼寺の創建は、利休の時代より100年遡ります。天正十五年に、豊臣秀吉が北野大茶湯を開いた際、千利休が竹林を掘って井戸をつくり、この水が茶の湯に適した清水であると茶をたて豊臣秀吉に供したと伝わっています。近隣の上七軒は、花街としては一番古く、こちらには近くの芸妓さんや舞妓さんもお茶を習いに来られます。

茶道は水なしでは考えられず、お茶の家は水を大事にします。寺では井戸水を使っていますが、水道水とはまるやかさが全然違います。

また、「三露」といって、初入りの前の水、中立ちの前の水、退席の前の水と、庭に打ち水をします。ここでも、茶道と水との関わりの深さが見られます。



境内に伝わる「利休の井」

🍵 四季で客をもてなす

庭も、お茶の席にはなくてはならない舞台装置です。亭主が客をもてなす準備は、まずは庭を清めることから始まります。水打ちをしたしずくで客の着物が濡れないよう葉っぱも拭き取ります。冬場は特に石の上が凍るので、草履をはく客人の足元が濡れて汚れぬようにと、庭の飛び石を念入りに拭きます。

お茶にかかわる人は、自然と人とのかかわりにについての意識は強いと思います。お寺の茶室にはアルミサッシというものはありません。雨の降りだす始めの一滴が落ちる音から聞こえて、コンクリートに囲まれていたら感じないものです。



西方尼寺の庭 利休手植えと言われるツバキが佇む

茶道具と炭

西方尼寺のお茶席の炉は電気を使っていないので、炭が使われます。「菊炭」といって、能勢の炭ですが、近年取り扱いが減り、思うように手に入らなくなったと聞いています。これは私たちにとっては深刻な問題です。近年では唐炭^{からすみ}といって中国産のものも使いますが、従来使ってきたものと違って火力が弱いようです。

お茶で使う炭は、「炭切り」という作業の時に粉がはぜたり、手を汚さないように、洗って干してから使います。ガスや電気のスイッチひとつでお湯を沸かせる時代になぜわざわざそこまでの手間をかけ、炭を使うのか。それは、お茶を一服差し上げようとする亭主側の演出の中に、文化が生まれると考えているからです。人の世の中、人が関わることの中で大事なものが生まれるのではないのでしょうか。



菊炭 菊のように見える模様が美しい

最近では、炭の扱い方を知らない子ども達も多いようです。お稽古に来る子どもさんも、炭や火鉢は「小学校で『昔の道具』として説明されているのを見た」という程度。炭を扱うこともなければ、火を起こしたりする経験もなく育っていくことになります。



充足のために ほんとうに必要なもの

『南方録』という利休のお茶に対する基本の考え方を説く書の中にこういう言葉があります。



茶室

『家はもらぬほ

ど、食事は飢えぬほどにて足ること也。是仏の教え、茶の湯の本意なり。水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたてて、仏に供え、人にもほどこし、吾も飲む。』

今日ではこれでもかと欲求を追及する飽満な時代になっています。お茶を通じて、自然の恵みにより充足を知り、自然を大事にする心も養われると感じています。

水も炭も、四季の美しさも、日本人が古来より森や自然から得てきた恵みの代表です。自然からの恵みを大切にしながら、人をもてなすという行為の中に総合芸術としての深みを見出してきた日本の文化、茶道。茶道の中で受け継がれる、現代の生活の中で省いてきた手間の中こそ、豊かな自然に恵まれた日本で培われてきた文化の髄があるのかもしれません。



お話を伺った方

藤原 盛順 氏

(西方尼寺住職／裏千家正教授)

能勢で菊炭を継承する

炭焼師 小谷 義隆さん (平成22年度「森の名手・名人」選定)



伝統の菊炭窯

能勢菊炭は、古くは平安時代にさかのぼる歴史を持ち、世界に誇る日本の炭焼技術だと思っています。しかし、エネルギー革命後の現代、本物の技術を継承する職人は数人で消滅の危機にあります。里山を利用することは、自然の再生という循環を促し、生物の多様性を維持することにもつながります。父の思いを繋ぎ、風土を活かし日本人の感性を表現する菊炭とその伝統技術を後世に繋げたいと思っています。



灰になっても美しい「菊炭」

木材の消費者に近い人達が林業を体験し、コストも含めて認識を深めてもらうことが大切だと思います。

かき さこ まさ き
柿迫林業 柿迫 正紀さん



森林の現状を考える —— 架線集材の現場から

—— お仕事について教えてください

主に林業の収穫部分、伐採、搬出、運送を行っています。もともとは請負の架線集材だけで成り立っていたのが、今では立木買いもあります。昭和30年代に高知の人が北桑に移住してきて、架線集材の技術が広まりました。父の代から架線集材を始め、私も中学時代から父に仕事を教わりました。平成になった頃、比較



プロセッサで見る間に材が玉切りされていく



架線の操作

的早い時期にグラップル（木材をつかみ、運ぶ機械）やプロセッサ（枝払いや玉切りを行なう機械）などの高性能機械を導入しました。作業は楽になり、生産効率も上がりましたが、それ以上に材価が下がってしまい、これ以上合理化はできないと思います。

架線集材は、道路を作って車両で集材する方法に比べて運ぶ距離も時間も短くなり効率的かつ安価です。

また、林道を作ると土砂流出や環境面で問題もあるので、必要最小限に留めておくという考え方もできます。このような技術については、林業大学校でも教えています。

現在の山の状況をどのように感じられていますか

戦後に一斉に植えて成熟した林が多いです。放置林として問題になっていますが、途中で手入れをやめたケースも多いです。当初20～30年は手入れをしていたが後継者がいなくてやめた場合はまだましで、植えっぱなしの森林は特に問題。獣害などで下層植生が喪失し斜面に水路ができてしまっていることもあります。単純に林道をつけて間伐をしていけばいいというのが主流でしたが、架線集材も見直されており、間伐というより皆伐して再生した方がいい場合もあります。



皆伐地での架線集材

成熟した森林があってどんどん木材の生産が可能でも、人手が足りないのが現実です。林業労働者も景気が悪い時には新しい人が来たが、他産業の給料が上がると来なくなります。人を呼ぶためには労働者の福利厚生面も充実させないといけないが、材価が下がってそのコストが賄えないのが実情です。人が減ることで過疎や中山間地域の疲弊につながっています。

PROFILE

柿迫林業代表。架線集材や素材生産などを手掛ける。株式会社 北桑木材センター代表取締役、京都府林業研究グループ連絡協議会会長などを歴任。



急な斜面で手際よく作業が進められる

モデルフォレストについてどう思われますか

まちの人の勉強の場だと考えています。山側では、ボランティアで時々来られるだけでは役に立たないという声もあるが、ある程度の仕事はしてくれると感じます。木材の消費者に近い人達が林業を体験し、コストも含めて認識を深めてもらうことが大切だと思います。林の中で巨木を眺めたりゆっくりするだけでも感じるものがあります。また、地元にしても、よその人が来るということできれいにしたり、手伝ってもらうための準備や計画を立てるなどで自分の地域に目が向きますし、それが刺激にもなります。

これからの林業についてどのようにお考えですか

環境を守るという視点が重要です。林業が自然破壊ではないということや、山林の現状と獣害や土砂災害などの問題、水源涵養などの森林の働き、そこに関わる林業や人の問題について、モデルフォレスト活動を通じて、皆で何ができるかを考えていただければと思います。

(文章：協会広報ボランティア 井上 和彦)



京都の 森の仲間たち

— 森林づくり団体紹介 —

▶ お話を伺ったお二人
代表 清水さん（左）、桑村さん（右）



宇治炭山里山の会

京 阪宇治駅から車で約 20 分、森林に囲まれた人口約 300 人の炭山集落に活動拠点の小屋がある。平成 24 年 8 月の豪雨災害後、地元で薪ストーブを利用している十数名の住民が倒木の有効利用のために活動を始めたのが会の結成のきっかけである。その後、災害箇所の見回りを行い改めて森林と災害について考え、林野庁の森林・山村多面的機能発揮対策交付金も活用して「災害に強い山づくり活動」に取り組んでいる。

会 員は現在約 60 名で、日常的に活動しているのは元サラリーマン、元教師や陶芸家等、地元在住の 7、8 名がコアメンバーであり、住居や公道周辺の危険木処理や間伐、薪づくりを行っている。土日には、地元の住民をはじめ、宇治や京都の市民も参加して、樹木観察、シイタケの菌打ち、ツリークライミング講習等を実施している。また地元の笠取第二小学校の理科学習の一環として自然観察会を開催している。

炭 山はもともと炭焼きが盛んだった地域だが、現在はほとんどが不在地主で戦後植林した後、手入れがなされず放置された状態になっている。このような現状において、会の活動に対する地元の認知度は高まっており、活動拠点小屋の提供や軽トラックの寄付等、地域からの支援も増えている。

桑 村明憲さんは、「活動を通して地域との繋がりがうんと強くなった。地域に住んでいる者が、地域の森を子供たちにどのようにして残すのかを考えて実行する。責任もあるが面白い。」



◀ シイタケの菌打ち体験



▶ 地域の子どもたちも参加している森林観察会

山仕事は健康にもいい。それが地域住民の安全につながり、やりがいがある。」と話す。

今 後も地域の山を地域で守るために手掛けたいことは多い。「時間が足りない」と桑村さんは笑う。昨年から、当地区でモデルフォレスト活動に取り組んでいる NTT の現地作業に際して、会員が指導員として協力している。地域の森を守る取り組みは、今後も広がっていく。

（取材：以森伝心ボランティア 宮本博司）

災害に強い山づくり活動

京都府山城広域振興局、京都府立大学と連携し、地域の災害の歴史を学び、亀裂等の危険箇所を示した災害危険箇所マップを作成し住民間で共有するなどの取り組み。



▶ 活動拠点の小屋



豊かな森を次世代へ

第40回全国育樹祭開催に向けて

第40回全国育樹祭の日程が決まりました

お手入れ行事

10/8(土) 山城総合運動公園(宇治市) 10/9(日) 府民の森ひよし(南丹市)

式典行事

併催行事・記念行事

- 国際森林シンポジウム 10/8(土) ガレリアかめおか(亀岡市)
- 全国緑のこどもサミット 10/8(土) 京都府中丹文化会館(綾部市)
- 森林・林業・環境機械展示実演会 10/9(日)、10(月) 長田野工業団地
アネックス京都三和(福知山市)
- 森の京都エクスカージョン 10/10(月) 丹波広域基幹林道(京都市、京丹波町)

カウントダウンモニュメントの寄贈

農林中央金庫から京都府あて全国育樹祭カウントダウンモニュメントが寄贈されました。

(2月5日(金)、京都会議において)



京都の森を守り育てる体験講座「大学の森で学ぶー森林環境教育と間伐体験」

平成27年12月6日(日)、京都市西京区において、小学校や保育園・幼稚園の先生、緑の少年団指導者、大学生や森林づくりボランティア団体の方など16名の方にご参加いただき、「京都の森を守り育てる体験講座『大学の森で学ぶー森林環境教育と間伐体験』」を実施しました。

前半は京都教育大学の山下宏文教授から「森林環境教育の重要性と進め方」と題して講義をいただき、後半は京都府立大学附属大枝演習林に会場を移し、京都森林インストラクター会の皆さんによる森林観察のあと、京都府立大学森林ボランティアサークル「森なかま」さんのお手伝いで参加者の皆さんに間伐作業を体験いただきました。

参加者からは「子どもたちに教えるとき、日本の森林面積がほぼ変わっていない、という視点から始めると問題に目が行きやすいと感じた」「間伐作業を初めて経験し、その大変さがわかった」などの感想をいただきました。



幼稚園の先生方のシイタケ原木の伐出体験をお手伝いしました

平成28年1月16日(土)嵯峨幼稚園の先生たちが、シイタケ栽培用の原木の生産について学ぶために北区雲ヶ畑の森に集合。雪がちらつく寒い中山仕事を経験されました。園長先生以下全員、立木を伐採するのは初めてということで、雲ヶ畑 commons の皆さんの指導のもと、足場の悪い山の斜面で「受け口」「追い口」などの専門用語も学習しながら悪戦苦闘。慣れない手つきながら一心に鋸を握る真剣な表情が印象的でした。伐採終了後は地元の方からおぜんざいのふるまいをいただき、山を守ることの大変さなども伺いながら、冷えた体を温めて笑顔で体験終了となりました。

(文章：協会広報ボランティア 森 稔)



※この事業は、幼稚園で園児たちが「シイタケの赤ちゃんさがし」として原木栽培をしていることから、先生方からの原木の生産についても学びたいという要望を受け、「緑の募金」による出前事業の一環として行われました。



園での園打ち体験の様子

事務局からのお知らせ—活動報告—



平成27年12月13日 京都市右京区内

京都の森を守り育てる体験講座 『伝統文化を支える森づくり体験』開催

協会会員や一般参加者ほか24名にご参加いただき、昨年に引き続き実施。鞍馬火祭り保存会の三宅会長から松明の材料となるコバノミツバツツジ等の調達が困難になっている現状についてお話しいただいたあと、京都大学農学部の高柳先生から森林の保全のための効果的な防鹿柵の設置について指導いただきました。



※平成27年度年賀寄附金配分事業「森の恵みを次世代につなぐ京都の森づくりを通じた地球温暖化対策モデル事業」

平成28年2月13日 京都市右京区内

再生可能エネルギーとしての薪を見直そう —「薪の駅」イベント開催

三井物産株式会社と京都府、当協会が協定を締結している活動地において、森林資源の利用を通じた持続可能な社会の実現を考えようと、薪作り講習会を実施しました。当日は、京都・薪ストーブ友の会の皆さんや協会会員のほか、カナダから調査のため京都に滞在中の学生も含め計14名の方にご参加いただきました。



平成28年2月5日 京都市上京区内

第4回「森林・林業・木材産業京都会議」開催



森林、林業、木材、住宅建築、森林保全に取り組む企業や団体などの関係者が一堂に会する同会議が今年も開催されました。府内全域から多数のご参加をいただき、モデルフォレスト運動の発展に貢献いただ

いた企業・団体の皆様の表彰のほか、講演、パネルディスカッションを行いました。

平成28年2月21日 宇治市内

「京都大作戦2015」記念植樹

天ヶ瀬森林公園内の「京都大作戦の森」で、「フォレスターうじ」、京都府立大学森林ボランティアサークル「森なかま」など約50名の方にご参加いただき、モミジなどの植樹を行いました。これは昨年行われた野外コンサート「京都大作戦2015」でお寄せいただいた緑の募金を活用し、山城モデルフォレスト推進協議会等の主催した「森林ボランティア交流会」の一環として行われたもので、作業後は森林ボランティアの皆さんの間で意見交流などが行われました。



緑の募金ご協力をお願い

緑の募金は、森づくりや緑化活動、「緑の少年団」活動に使われています。皆様のご協力をお願いいたします。

● 郵便振替や銀行振込で

いつでも、どこでも、誰でも募金ができます。

1. 郵便振替

00990-1-83253

公益社団法人

京都モデルフォレスト協会

2. 銀行振込 京都銀行府庁出張所

普通 3154305

公益社団法人 京都モデルフォレスト協会

理事長 柏原 康夫

木製品を使うことで元気な森林を増やしましょう

※府内産木材を使用したグッズによる募金も取扱中です。
(詳しくは事務局までお尋ねください)



● 商品購入や募金箱で

「緑の募金付き商品」を購入したり、各所に設置された「緑の募金箱」に直接募金することで、ご協力いただけます。「緑の募金付き商品」開発・販売や募金箱の設置等、様々な形でご協力いただける店舗様、事務所様も募集しています。

これからもよろしくお願いいたします

京都市下京区四条通柳馬場東入
TEL(075)211-2111
<http://www.kyoto-shinkin.co.jp/>

発行:公益社団法人 京都モデルフォレスト協会
〒604-8424 京都市中京区西ノ京樋ノ口町123 京都府林業会館3階

TEL&FAX 075-823-0170 E-mail kyomori@kyoto-modelforest.jp

URL <http://www.kyoto-modelforest.jp> [facebook](https://www.facebook.com/KyotoModelForest) <https://www.facebook.com/KyotoModelForest>

2016年3月発行

入会案内資料をご希望の方は
ご連絡ください。